

〈論 説〉

安政元年のペリー来航時の相撲実演について

―江戸の相撲取たちの動向を中心に―

谷 釜 尋 徳

一 問題の所在

嘉永六（一八五三）年と安政元（一八五四）年におけるアメリカ東インド艦隊総司令長官のマシュー・カルブレイス・ペリー（以下「ペリー」）の来航は、日本の開国を促進した歴史上の転換点として知られている。ペリー来航は、日本のスポーツ史上においても重要な画期となった。安政元（一八五四）年の二度目の来航時には、江戸勸進相撲の相撲取たちが土俵入りと稽古相撲を披露しているからである。異文化世界から来日したアメリカ人にスポーツを通じて自国文化を発信したこの出来事は、日米スポーツ交流の嚆矢と捉えることができる。

一方、この時、アメリカ側もスポーツを実演した可能性が伝えられてきた。例えば、木下は、通史的な試みの中で「ペリーの二度目の来航の時、浦賀で相撲をみせた日本に対し、アメリカ水平はボクシングを^①実演した」と記す。また、日本の相撲取とアメリカ船の乗組員が格闘技戦を繰り広げたと伝える文献もある。今村が『体育史資料年表』において記載した「力士小柳、アメリカカ水平と力競べをし、その怪力をしめす^②。」という一文や、『近代日本

『総合年表』の「力士小柳、米人水夫三人を相手に相撲をとり、勝って評判となる。」⁽³⁾という記述は、その好例であろう。

浜田彦蔵のように、漂流から救助されてアメリカ本国で現地のスポーツを目の当たりにした稀有な事例はあるものの、⁽⁴⁾来日したアメリカ人が何らかの形でスポーツを披露したり、日本人と対戦したことは、黒船来航以前には記録が見当たらない。

それでは、安政元（一八五四）年の画期的な日米スポーツ交流は、どのような経緯で、どのような内容をもって行われたのであろうか。従来、ペリー来航時のスポーツ交流は、史料的な検証を経た歴史研究としては取り組まれてこなかった。ペリーが相撲を見たことは周知の事実として流布してきたが、その詳細は明らかにされていないのである。

『黒船談叢』には、ペリー来航時に日本の相撲取が、レスリングやボクシングの心得があるアメリカの乗組員と対決した模様が記されている。⁽⁵⁾しかし、史料的な裏付けを欠いており、相撲取の武勇伝を断片的に語った創作の域を出るものではない。また、酒井⁽⁶⁾や伊藤⁽⁷⁾も相撲史の観点からペリーの相撲見物に触れているが、基本的には『黒船談叢』の内容を追随したものである。

太田⁽⁸⁾の研究は、日本側のペリーへの贈答品と相撲実演の諸相を取り上げているが、アメリカ側のスポーツ披露の有無や相撲取との対決には言及されていない。西村⁽⁹⁾は黒船を実地見学した福山藩士の手記を紹介しているが、ペリーの相撲見物については断片的な記述にとどまっている。

西川⁽¹⁰⁾、加藤⁽¹¹⁾、齋藤⁽¹²⁾は、日本側がペリーに対して相撲を実演した模様を紹介しているものの、その経緯の詳細には触れていない。『横浜市史』⁽¹³⁾には相撲実演に関する記述はあるが、自治体史の通史編という性質上、ごく簡単な概

説程度である。

以上より、従来の研究では、日米スポーツ交流の端緒ともいえるこの重要な出来事について、史料的な裏付けをともなう考察が欠落し、どのような経緯で当日をむかえ、日米双方がどのようにスポーツを通じて交流を深めたのか、全体像が把握されないまま通説が形成されてきた。スポーツ史における日米の接着面を知る上でも、ペリー来航時のスポーツ交流は詳細に論じられる必要があるであろう。

そこで本研究では、安政元（一八五四）年のペリー来航時に行われた相撲実演について、江戸の相撲取たちの動向を中心に、その経緯や實際を繙くことにしたい。具体的には、下記の構成で展開する。(一) 嘉永六（一八五三）年のペリー来航時における相撲会所（現在の日本相撲協会）の動向を確かめる。(二) 安政元（一八五四）年の二度目のペリー来航時に相撲取たちが任務に参画していく経緯と本番に至る準備段階を検討する。(三) 日本側の史料から当日の相撲実演の様子や日米の対戦について明らかにする。(四) アメリカ側の史料から日本人の相撲実演に対する反応やアメリカ側のスポーツ披露の有無を検証する。

本研究で用いる史料について、日本側には、ペリー来航時の相撲実演を現地で目撃した日本人の記録や公的な文書が存在する。また、当日に至る経緯や準備状況について相撲会所が町奉行所⁽¹⁴⁾とやり取りした記録も残されている。

一方、アメリカ側の文献として、ペリー艦隊に乗船した人びとの見聞録⁽¹⁵⁾が挙げられる。彼らは、日本の相撲取が披露した各種の技芸を事細かに描写している。異文化世界から来日したアメリカ人の客観的な観察眼は、日本側の史料には周知のものとして記されないような事柄まで捉えていた。しかし、訪日外国人の見聞録は「自分たちの文化を物指しにして相手を測る」⁽¹⁶⁾手法で記述されているため、近代化を成し遂げた「欧米人の価値観のみ、当時の

日本人をながめることになってしま⁽¹⁷⁾」という留意点も存在する。事実、ペリーらによる観察記録には、初見の事物に対する細やかな視点が確認できる反面、先入観が多分に入り込んでいる感は否めない。

こうした諸点を踏まえ、本研究では、日米双方の史料を比較検討しながら課題の解明を試みたい。なお、文中において、当時の日本側の史料に合わせて日付を旧暦で表記した。

二 嘉永六年のペリー来航と相撲会所の動向

二一 相撲会所の願書提出

嘉永六（一八五三）年六月三日、ペリーが四隻の軍艦を率いて浦賀沖に来航する。その目的は、アメリカ大統領フィルモアの開国を要求する国書を日本側に渡すことであった。ペリー艦隊の公式遠征記録には、「艦隊が海峽を通過して浦賀の内湾に入ると、多くの漁船が大慌てでその場から逃げ出し、漁夫たちは安全な場所まで遠ざかったと確信すると、櫓を漕ぐ手を止め、心配そうな顔つきで艦隊を見つめていた。」⁽¹⁸⁾と記されている。

その後、ペリー艦隊は江戸湾に侵入する。江戸の町名主が市中の世相を編年体でまとめた『武江年表』には、この時の模様が「江戸の貴賤、始めには仔細を弁せずして恐怖して寝食を安せず、老人婦幼をして郊外遠陬に退かしめしもありしが⁽¹⁹⁾」と綴られている。黒船の来航は、当初は江戸市中を混乱に陥れ、人びとは恐怖で夜も眠れず、郊外に避難する者もいたという。

未曾有の国難を目の当たりにして自ら協力を申し出たのが、江戸勧進相撲の興行運営組織の相撲会所である。ペリーの浦賀来航の報から数日後の六月一日、相撲年寄⁽²⁰⁾は北町奉行所に左記のような願書を提出した。⁽²¹⁾

今般浦賀湊へ異国船来着に、御固めの御人数追々御出張の御儀承り、驚人奉恐入候御儀に御座候、乍恐私共一同相撲興行家御免渡世仕、大勢之者身命送冥加至極難有仕合に奉存罷在候得者、何用の御用にて相勤め申度、然る処重立候相撲の者共上方筋へ罷越、当時御府内に罷在候相撲之者二百人余も有之候処、御用に相立候義にも候はゞ身命投捨相勤申度段拳つて申上候得共、力業而已にて外心得候義無之、御道具持運人足にても被仰付被下置はゞ難有仕合に奉在候

浦賀への異国船の来航によって大名らが海防警備に奔走しているが、幕府から免許を受けた相撲興行で生計を立てる我々としても、何かしら貢献したい。上方へ巡業に出ている主要な相撲取を除く二〇〇名余りの人員で、幕府の命に従いどのような御用でも勤めたい。相撲取たちは力仕事のほかには心得がないので、荷物運搬の人数のような役割を与えてもらえるとありがたい、という趣旨の申し出である。

文中、主要な相撲取たちは上方へ赴いているとあるが、同年六月、大坂の北堀江にて勸進相撲の興行があり、大関の鏡岩や小柳をはじめ江戸の幕内力士が駆り出された記録が残っている⁽²²⁾。しかし、上記の願書に追記して「且又多人数御用弁に相成候御義に御座候はゞ旅行之者共早速呼戻度奉存候⁽²³⁾」と記されたように、相撲年寄は江戸に残された二〇〇名余りの相撲取で不足するようなら、巡業中の幕内力士たちを直ちに呼び戻すことまで考えていた。

二―二 町奉行所による相撲年寄への聞き取り

相撲年寄からの申し出は、翌日六月一二日にペリー艦隊が引き上げたことで持ち越しとなったが、町奉行所には重要な案件として受け止められていた。ペリーは翌年の再来航を予告して退去したため、早急にさまざまな対策を

講じる必要があったからである。

同年七月六日、町奉行所は相撲年寄の待乳山楯之丞と玉垣額之助を呼び出し、協力の申し出は奇特だと賛辞を送っている。また、八月二〇日、町奉行所は相撲年寄の二人を再度呼び出し、江戸の相撲取の総人数や例年の巡業の時期・日数などの詳しい聞き取りを実施した。⁽²⁴⁾

相撲年寄は、毎年更新される相撲人別帳の情報をもって、嘉永六（一八五三）年時点における江戸の相撲取の総人数を七〇五人と回答している。⁽²⁵⁾ また、相撲取の年間予定については、次のように回答した。例年、江戸では二月下旬から三月上旬にかけて勸進相撲の興行が行われるが、場所が終わると有力な相撲取は六月中旬以降に江戸を旅立って一〇月中旬までは地方で稼ぎ、一〇月下旬に江戸へ戻って冬の興行に備える。しかし、大抵の相撲取は五日から一〇日程度で江戸に戻れるので、必要なら遠国にいる者でも昼夜に限らず移動して早々に江戸に帰府させる心づもりだといふ。⁽²⁶⁾

このように、町奉行所は時期によって登用できる相撲取の人数を聞き出し、具体的な目算を立てていった。ペリーの再来航に備えて、江戸の相撲取たちの登用は、この時点でかなり現実味を帯びていたといえよう。

三 安政元年のペリー再来航にともなう相撲会所の動向と相撲取の参画に至る経緯

三―一 相撲会所の願書提出と相撲取の選抜

安政元（一八五四）年一月一六日、ペリーは七隻の軍艦を率いて浦賀に再来航した。すると、前年より温存してきた案を実行に移すべく、町奉行所と相撲年寄のやり取りが本格化する。

一月一八日、相撲年寄総代の追手風喜太郎、待乳山楯之丞、玉垣額之助の連名で、南町奉行所の池田播磨守に宛

て再び願書が提出された⁽²⁷⁾。願書の内容は、前年に提出したものと同様なので引用は控えるが、「御国」のため相撲取たちに荷物の運搬等の御用を申し付けてほしいという文面で結ばれている。

その後、町奉行所は相撲会所の申し出を聞き入れ、力仕事に長けた相撲取たちの人選を命じる。これを受けて、一月二四日、相撲年寄から人選の結果が町奉行に報告された⁽²⁸⁾。相撲会所による願書の再提出（一月一八日）から人選の報告（一月二四日）まで、わずか一週間の出来事である。

極内密被 仰渡候相撲之者共人撰仕候處、力強見請候者五十人余有之、米俵壹俵擔、壹俵片手二下ケ、又ハ兩手二下ケ、或ハ貳俵壹所ニ擔、壹俵兩手を延し差上候儘、向迄參り可申、尤四斗俵ニ御座候、五斗俵ニテハ、貫目格別相違不仕候得共、かさハリ歩行不自由ニ有之、乍恐成丈太キ繩ニテ俵をメ候方持辨利宜、右御用被仰付候節ハ、相撲之者二見へ不申様仕度、前髪有之候者頬冠りニても爲仕度、上下着用仕候テハ持運手重ニ相成、却テ見分不宜ニ奉存候、此段御請奉申上候

冒頭に「極内密」とあるように、本件は機密事項の取り扱いだだった。相撲年寄は町奉行所の命に従い「力強見請候者」を五〇名余り選出しているが、それ以下の文面は「米俵」に関わる内容が続く。幕府は、アメリカ側に日本の米を贈呈する際に、米俵を運搬する任務を相撲取たちに命じていたことがわかる。人選の基準は、米俵一俵を担いだ状態でさらに片手ないし両手で一〜二俵の米俵を持つことができる、あるいは二俵の米俵を担いだまま手を伸ばしてさらに一俵を高く持ち上げられることだったという。ただの荷物運搬の要員ではなく、日本が誇る力自慢の相撲取たちには、ペリーをはじめアメリカ艦隊の前で、重たい米俵を何俵も自在に担ぎ上げるパフォーマンスが期

待されていたのである。

続けて、米俵は五斗入りでは嵩張って持ち歩きにくいので四斗入りを用意してほしい、なるべく太い縄で米俵を締め付けた方が便利である、相撲取だとわからぬように前髪を頼かむり等で隠したい、袴を着用すると動きにくく見栄えも悪い、などと上申された。国家の威信に関わる一大事業を成功裏に終えるために、詳細なやり取りが交わされていたのである。

この時、相撲年寄の報告には、候補者として八五人の相撲取の名前が挙げられている。表1は、候補者として選ばれた相撲取の四股名に、嘉永六（一八五三）年一月場所、安政元（一八五四）年二月場所の番付情報を付け合わせたものである。力自慢を基準に選考された相撲取たちは、東西の関脇や小結をはじめ幕内の看板力士に、幕下、番付外の相撲取も加えた構成だったことがわかる。

三―二 第二回目の相撲取の選抜と役割分担

相撲年寄の報告に対して、南町奉行所からは「相撲之もの共へ、時宜二寄、近々御用可有之候二付、内密御尋⁽²⁹⁾、すなわち場合により近々御用を申し付ける旨の返答があった。

その後、相撲会所は本格的な準備に乗り出し、本番に向けた予行演習も実施する。相撲年寄は予行演習を実施した感触として、「私共限五斗俵を弟子共二爲取扱候處、四斗俵ト違嵩張候間、提候而ハ膝へ障、歩行見苦敷御座候⁽³⁰⁾」と記し、弟子衆に五斗入りの米俵を持ち歩かせたところ四斗入りよりも嵩張って膝に負担がかかり、歩く姿が見苦しくなってしまったと報告している。

相撲年寄はさらなる人員の絞り込みと役割分担を決定し、二月九日付で町奉行所に申し出る。具体的には、「腕

表1 安政元(1854)年1月24日に報告された人選結果

力士名	番付		力士名	番付	
	嘉永6年11月	嘉永7年2月		嘉永6年11月	安政元年2月
猪王山 森右衛門	関脇(東)	関脇(東)	谷響 太助	番付外	番付外
階ヶ嶽 龍右衛門	小結(西)	小結(西)	甲斐峰 三八	番付外	番付外
荒熊 力之助	小結(東)	前頭筆頭(東)	殿 峰五郎	幕下28枚目(西)	幕下18枚目(西)
雲龍 久吉	前頭筆頭(東)	小結(東)	大見崎 大五郎	幕下45枚目(東)	幕下40枚目(東)
荒馬 吉五郎	前頭筆頭(西)	前頭筆頭(西)	鬼ヶ崎 勝之助	幕下39枚目(西)	幕下32枚目(西)
六ヶ峯 岩之助	前頭2枚目(西)	前頭2枚目(西)	荒鹿 幸助	幕下21枚目(東)	幕下16枚目(東)
象ヶ鼻 灘五郎	前頭4枚目(西)	前頭4枚目(西)	江戸ヶ浦 八十七	番付外	番付外
一力 忠五郎	前頭5枚目(西)	前頭5枚目(西)	仮名頭 桑吉	幕下36枚目(東)	幕下34枚目(東)
雲早山 鉄之助	前頭3枚目(東)	前頭3枚目(東)	嶋ノ浦 新藏	幕下30枚目(西)	幕下27枚目(西)
荒岩 亀之助	前頭6枚目(東)	前頭6枚目(東)	御所浦 平大夫	番付外	番付外
宝川 石五郎	前頭6枚目(西)	前頭6枚目(西)	勢見崎 米藏	幕下39枚目(東)	幕下41枚目(東)
谷風 市藏	前頭7枚目(東)	前頭7枚目(東)	江島山 林藏	番付外	番付外
黒崎 佐吉	幕下筆頭(東)	前頭7枚目(西)	立神 雲右衛門	番付外	番付外
和田ヶ原 甚四郎	前頭8枚目(東)	前頭8枚目(東)	立岩 金吉	番付外	番付外
沖ノ濱 勝藏	幕下2枚目(西)	前頭8枚目(西)	大濱 喜太郎	幕下48枚目(東)	幕下38枚目(東)
花龍 平五郎	番付外	番付外	櫻山 花助	番付外	番付外
外ヶ濱 浪五郎	幕下3枚目(西)	幕下3枚目(西)	石ノ戸 三八	番付外	番付外
春柳 芳五郎	幕下2枚目(東)	幕下2枚目(東)	新川 平助	番付外	番付外
竹破 嘉藤次	幕下3枚目(東)	幕下3枚目(東)	名取川 吉之助	番付外	番付外
武藏湯 伊之助	幕下7枚目(東)	幕下6枚目(東)	榭山 平次	番付外	番付外
玉川 浪五郎	幕下4枚目(西)	幕下4枚目(西)	鹿嶋湯 菊松	番付外	番付外
武ノ川 弥助	幕下5枚目(東)	幕下4枚目(東)	柏沼 鉄五郎	番付外	番付外
大横 幸次	幕下6枚目(西)	幕下6枚目(西)	高田川 重藏	番付外	番付外
長谷川 忠吉	幕下7枚目(西)	幕下7枚目(西)	浅ノ川 兵吉	番付外	番付外
荒飛 甚太夫	幕下6枚目(東)	幕下5枚目(東)	丑ノ角 千吉	番付外	番付外
金龍 雲右衛門	幕下8枚目(東)	幕下7枚目(東)	鉄搦 太	番付外	番付外
千田川 吉藏	番付外	幕下10枚目(西)	男山 運太	番付外	番付外
箕嶋 邦五郎	幕下9枚目(東)	幕下8枚目(東)	光ヶ濱 政吉	番付外	番付外
龍ヶ峰 柳太	幕下12枚目(東)	幕下10枚目(東)	三國山 善吉	番付外	番付外
松ヶ枝 喜三郎	幕下20枚目(西)	幕下17枚目(西)	萩ノ山 勇吉	番付外	番付外
登龍山 米藏	番付外	幕下26枚目(東)	大ノ嶋 平吉	番付外	番付外
明石湯 浪五郎	幕下11枚目(東)	幕下9枚目(東)	越ノ戸 清十	番付外	番付外
玉頭山 峰右衛門	番付外	幕下12枚目(西)	嶋ヶ崎 倉吉	番付外	番付外
鳥田川 又吉	幕下29枚目(東)	幕下28枚目(東)	大崎 松五郎	番付外	番付外
弥高山 鉄之助	幕下10枚目(東)	幕下11枚目(東)	湊ヶ岩 幸介	幕下19枚目(東)	幕下21枚目(東)
雲珠卷 兵藏	幕下27枚目(東)	幕下25枚目(東)	完ヶ峯 幸吉	番付外	番付外
響雲 吉藏	番付外	番付外	一ノ嶋 新藏	番付外	番付外
氷室山 市太郎	番付外	幕下40枚目(西)	玉ノ海 宗次郎	番付外	番付外
菊ヶ浜 松之助	番付外	番付外	五人張 松五郎	番付外	番付外
立田ノ吉藏	幕下35枚目(西)	幕下30枚目(西)	大蛇湯 大助	幕下41枚目(西)	幕下34枚目(西)
武者ヶ崎 利助	幕下32枚目(東)	幕下29枚目(東)	小松山 鶴吉	番付外	番付外
高越山 谷五郎	幕下34枚目(東)	幕下27枚目(東)	龍ヶ淵 勇吉	番付外	番付外
旭野 勘兵衛	番付外	番付外			

人選結果は、追手風喜太郎・玉垣額之助「嘉永七寅年 正月廿四日 相撲年寄總代上申書」維新史料編纂会・文部省編『大日本維新史料 第2編 第5』文部省、1943、pp.137-140より作成。

番付の情報は、酒井忠正『日本相撲史(上巻)』大日本相撲協会、1956、p.347、p.350より作成。

強相撲之もの」と「手代り之者」の二つのグループに振り分けられた。前者は、贈呈品としての米俵を持ち運ぶ役割の相撲取を指している。後者は交代要員を意味するが、「何れも幕之内ニ而、格別大柄ニ有之、見體宜御座候、尤ち、り甚敷もの、又ハ痛所有之者等ニ而働方ハ仕兼可申候⁽²¹⁾」との説明が加えられた。彼らは幕内で活躍する大柄な相撲取たちで、肥満が甚だしい者や怪我人もいるので、米俵の運搬には参加できないのだという。

表2は、第二回目の人選と役割分担の結果に加えて、一回目の選出状況と番付情報を記載したものである。二回目は「腕強」が四九人、「手代り」が一人選出され、そのうち四〇人が一回目の人選から継続して候補に選ばれた。この時点で新規に選抜されたのは二〇人で、中には小柳常吉、鏡岩濱之助という東西の大関や、白真弓肥太右衛門も加わっている。

特に白真弓は、番付欄外の「張出」で客寄せの土俵入りを披露していたが、『武江年表』の嘉永六（一八五三）年一月の記事に「白真弓肥太右衛門といふ角舩人出る。二十一歳、身の丈六尺八寸余（約二〇八センチ―引用者注）、目方四十貫五百目（約一五〇キログラム―引用者注）、飛驒国木谷村の産といふ⁽²²⁾。」と紹介されるほどの注目度を誇った。

相撲年寄は、二月九日の人選結果の上申書に、任務当日に向けて次の事柄を申し添えている。⁽²³⁾（一）現場へ赴く者は羽織袴を用意するが、米俵の運搬は裸の方が働きやすい。（二）江戸から現地までの移動は目立たないように船を用いる。（三）船中の食事は自分たちで賄うが、現地での食事は幕府が負担してほしい。（四）今回名前を挙げた相撲取のほかに一〇名ほどが同行するが、その分の経費も幕府が負担してほしい。（五）これだけの大人数の旅宿を自力で探すことは難しいので、幕府の方で手配してほしい。

この時点で、服装、移動手段、経費負担、宿泊先の手配にまで及んで、本番に向けた具体的な計画が練られてい

表2 安政元(1854)年2月9日に報告された人選結果

力七名	2月9日時点の 選出状況	1回目の 選出状況	番付		力七名	2月9日時点の 選出状況	1回目の 選出状況	番付	
			嘉永6年11月	安政元年2月				嘉永6年11月	安政元年2月
猪王山森右衛門	腕強	候補	腕強(東)	腕強(西)	仮名頭 象吉	腕強	候補	幕下36枚目(東)	幕下34枚目(東)
階ヶ嶽龍右衛門	腕強	候補	小結(東)	小結(西)	米笠山 市太郎	腕強	候補	番付外	幕下40枚目(西)
荒熊力之助	腕強	候補	前頭筆頭(東)	前頭筆頭(西)	大見崎 大五郎	腕強	候補	幕下45枚目(東)	幕下40枚目(東)
荒馬 五郎	腕強	候補	前頭3枚目(東)	前頭3枚目(西)	鬼ヶ崎 勝之助	腕強	候補	幕下39枚目(西)	幕下32枚目(西)
雲早山 鉄之助	腕強	候補	前頭4枚目(東)	前頭4枚目(西)	大滝喜太郎	腕強	候補	幕下48枚目(東)	幕下38枚目(東)
象ヶ鼻 羅五郎	腕強	候補	前頭5枚目(東)	前頭5枚目(西)	大嶋 大助	腕強	候補	幕下41枚目(西)	幕下34枚目(西)
一力 忠五郎	腕強	候補	前頭5枚目(東)	前頭5枚目(西)	旭野 松五郎	腕強	候補	幕下47枚目(西)	幕下33枚目(西)
響瀧 立吉	腕強	対象外	前頭6枚目(東)	前頭6枚目(西)	河津山 次郎吉	腕強	対象外	番付外	番付外
宝山 石五郎	腕強	候補	前頭6枚目(東)	前頭6枚目(西)	男山 運太郎	腕強	候補	番付外	番付外
荒岩亀之助	腕強	候補	前頭6枚目(東)	前頭6枚目(西)	三吉山 佐助	腕強	対象外	番付外	幕下49枚目(東)
谷風 市藏	腕強	候補	前頭7枚目(東)	前頭7枚目(西)	岩ヶ峰 岩吉	腕強	対象外	番付外	番付外
黒崎 平五郎	腕強	候補	番付外	番付外	御所浦 平次夫	腕強	候補	番付外	番付外
花籠 平五郎	腕強	候補	幕下4枚目(西)	幕下4枚目(西)	立神 市五郎	腕強	対象外	番付外	番付外
玉川 浪五郎	腕強	候補	幕下9枚目(東)	幕下8枚目(東)	勝時 米吉	腕強	対象外	番付外	番付外
箕嶋 邦五郎	腕強	候補	幕下12枚目(東)	幕下10枚目(東)	雷ヶ音 雲五郎	腕強	対象外	番付外	番付外
龍ヶ峰 柳太	腕強	候補	番付外	番付外	立岩 金吉	腕強	候補	番付外	番付外
弥高 山 鉄之助	腕強	候補	番付外	幕下12枚目(西)	郡山 万吉	腕強	対象外	番付外	番付外
玉頭山 峰右衛門	腕強	対象外	番付外	番付外	五人張 松五郎	腕強	対象外	番付外	番付外
定ヶ峰 五郎吉	腕強	候補	幕下11枚目(東)	幕下9枚目(東)	小柳 常吉	手代り	対象外	大関(東)	大関(東)
明石 湯 浪五郎	腕強	候補	幕下20枚目(西)	幕下17枚目(西)	鏡吉 漢之助	手代り	対象外	大関(西)	大関(西)
松ヶ枝 喜三郎	腕強	候補	幕下28枚目(西)	幕下18枚目(西)	雲龍 久吉	手代り	候補	前頭筆頭(東)	小結(東)
殿 崎 五郎	腕強	候補	番付外	幕下26枚目(東)	六ヶ峯 吉之助	手代り	候補	前頭2枚目(西)	前頭2枚目(西)
登龍山 米藏	腕強	候補	幕下32枚目(東)	幕下29枚目(東)	常山 五郎次	手代り	対象外	腕強(西)	腕強(西)
武者ヶ崎 利助	腕強	候補	幕下35枚目(東)	幕下30枚目(東)	黒岩 十次郎	手代り	対象外	前頭3枚目(西)	前頭3枚目(西)
三ヶ濱 政吉	腕強	候補	幕下34枚目(東)	幕下27枚目(東)	御用木 雲右衛門	手代り	対象外	前頭4枚目(東)	前頭4枚目(東)
高越山 谷五郎	腕強	候補	幕下21枚目(東)	幕下16枚目(東)	君ヶ藏 助三郎	手代り	候補	前頭2枚目(東)	前頭2枚目(東)
荒熊 幸助	腕強	候補	幕下20枚目(東)	幕下15枚目(東)	和田ヶ原 連四郎	手代り	候補	前頭8枚目(西)	前頭8枚目(西)
三ヶ浦 久八	腕強	候補	幕下39枚目(東)	幕下41枚目(東)	沖ヶ濱 勝藏	手代り	候補	幕下2枚目(西)	前頭8枚目(西)
夢見崎 米藏	腕強	候補	幕下35枚目(西)	幕下30枚目(西)	白真弓 肥太右衛門	手代り	対象外	強出(東)	強出(東)
立田ノ吉藏	腕強	候補							

人選結果は、追手廻喜太郎・玉垣輝之助「嘉永6年(1854)年二月九日相撲年寄録代上出書」維新史料編纂会・文部省編「大日本維新史料 第2編 第5」文部省、1943、pp.141-145より作成。
番付の消線は、番井忠正「日本相撲史(上巻)」大日本相撲協会、1996、p.347、p.350より作成。
※「腕強相撲のもの」を「腕強」、「手代り」之者」を「手代り」と表記した。

たのである。

三―三 相撲取たちの現地移動と当日に至る準備

こうして下準備が整うと、二月一七日、相撲取たちは現地向けて船で移動する。江戸詰め尾張藩士が藩主の徳川慶勝に宛てて報告した『内密書』によると、「夜中本所回向院前年寄伊勢屋五太夫等江相集り」とあり、相撲取たちは出発前日（二月一六日）の夜には両国の回向院周辺の相撲年寄宅に集合していた。

『正月米船江戸内海渡来一件聞書及覺書』には、翌朝、相撲取たちが江戸橋の河岸から船で浦賀表へ旅立ったと記されている。江戸の古本商が編んだ『藤岡屋日記』によれば、船旅を終えた相撲取たちは、一七日から東海道保土ヶ谷宿に泊まり、本番に備えて待機していたという。³⁶ また、浦賀奉行所の与力が書いた『浦賀御用日記』には、二月一七日の記事に「今日相撲之もの到着いたし候旨、年寄追手風喜太郎・玉垣額之助届出候二付、程ヶ谷宿二旅宿申付置候」とある。³⁷ 事前に相撲年寄から届け出があったため、浦賀奉行所が保土ヶ谷の旅宿を手配していたのである。

これと並行して、相撲取たちが運搬を託された米俵の準備も進んでいた。前出の『内密書』には、当初、アメリカに贈呈する米は横浜村で現地調達する予定だったが、幕府の御用達の町人によって江戸から神奈川宿に輸送される計画に変更されたと記されている。³⁸ 町奉行配下で江戸市中の警備を担当していた南定廻りは、二月一九日付で「浅草御藏に而御用意之、来る廿六日朝出帆、神奈川表迄被遣候趣、…廻船上乗は小揚頭安之介と申者參候由」と報告している。この時点で、贈呈用の米俵は、浅草の米蔵で調達して、二六日の朝に神奈川表に向けて船で輸送できるように準備を整え、乗組員の手配まで完了していたのである。³⁹

二月二四日、待機中の相撲取たちに町奉行所から命令状が届き、任務遂行の本番が二月二六日に決定した。これを受けて、前日の二五日、相撲年寄の追手風喜太郎と玉垣額之助は、幕吏の谷村源右衛門らとともに横浜の応接所である条約館に向かい、米俵の運搬に係る場所の下見と運搬後に稽古相撲を上演することを確認する。⁽⁴⁰⁾

すでに一月二三日付で、幕府は官舎の造営と修繕を司る小普請奉行に対して土俵の設営を命じていることから、⁽⁴¹⁾相撲取の登用は、米俵の運搬と併せて土俵上の相撲上演も含めた案件として進んでいたと見てよい。

四 日本側の史料にみる相撲上演の実際

安政元(一八五四)年二月二六日、江戸の相撲取たちがペリーの目の前で米俵の運搬と稽古相撲を披露する日が訪れた。東海道沿いの生麦村(現在の横浜市鶴見区)に居住していた関口東作の日記によれば、当日の天気は「晴天」だったという。⁽⁴²⁾以下では、この日に行われたスポーツ交流のあらましを、日本側の史料を用いて確認していきたい。

四―一 米俵の運搬

江戸幕府とペリー艦隊の交渉に関する日本側の議事録『墨夷応接録』には、二月二六日朝の記録として、「此日、被下物并応接役々より贈り物、皆々応接所陳列仕置候」⁽⁴³⁾とある。当日の朝、米俵を含む贈呈品は応接所に陳列されていたという。

実際の米俵の運搬について、『内密書』は「異人上中官応接処江通り候以後ニも候哉、兼而御呼寄ニ相成居候相撲共、素裸取廻シニ而出立」⁽⁴⁴⁾と伝えている。アメリカ側の上役たちが応接所に入る頃合いを見計らって、裸体に廻

しを締めた相撲取たちが登場し、米俵の運搬が開始されたようである。

江戸幕府の公式史書『温恭院殿御実紀』には、相撲取たちの米俵の運搬が次のように書き留められている。⁽⁴⁵⁾

五斗入米二百俵。鶉三百羽。右乗組惣中江。右者浅草御藏を取出し。浦賀へ廻船。但角力取五十人。並御藏小揚之者力量勝れたる者を撰。右米俵之取次致させたる由。此時小柳者異人共之目に留り候よし。白眞弓ハ俵持。或は手玉に取。又者頭に上て運候由。

当日に至る経緯は既述の通りであるが、米俵のサイズは相撲年寄が事前に希望していた四斗入りの用意は叶わず、五斗入りが用いられたようである。また、大関の小柳常吉はアメリカ側の注目を集め、白眞弓肥太右衛門は米俵を軽々と持ち上げ頭上にのせるなど怪力ぶりを発揮したという。小柳と白眞弓は、いずれも第二回目の人選では交代要員の「手代り之者」として報告されていたが、本番では米俵の積み込みに参加し大活躍したことがわかる。

当日の相撲取たちの活躍ぶりは、相撲年寄が町奉行に宛てた実施報告の文面からも知ることができる。そこには、「去ル廿六日、横濱御場所二而、俵持運方取扱禪ヲ相勤候様被仰渡候二付、書上候相撲之者共、右支度仕、貳俵握、又は壹俵指切、或は壹俵齒二啞候儘運候者も有之、暫時二運仕廻申候⁽⁴⁶⁾」と記され、相撲取の中には、いっぺんに二俵を担ぎ歩く者、一俵を指先で持ち運ぶ者、一俵を口（齒）に咥えたまま運ぶ者もいたという。

米俵の運搬にはアメリカ艦隊の乗組員も参加した。『藤岡屋日記』に「角力取大勢罷出、御小屋より海岸迄角力取一人二而二俵ツ、運び出し、夫ハバツテイヤ迄ハ人足共手伝致、異人共運び込申候⁽⁴⁷⁾」とあるように、相撲取が運び出した米俵を乗組員らがバツテヤ（隊員を乗せて往復する小船）まで積み込む手伝いをしていたことがわか

る。

ところが、アメリカ船の乗組員たちにとって米俵の重量は相当なもので、積み込みに難儀したようである。久良岐郡石川郷中村（現在の横浜市中区）の名主を務めた石川和輔が編纂した『亞墨理駕船渡來日記』によると、「異人下官の者大勢ニ而壹俵宛を貳人三人宛ニ而小船え積入申候異人壹人足を踏損し俵と共に海中え轉落し水底ニ沈ミ良久して這出候⁽⁴⁸⁾」とあり、アメリカの乗組員たちは一俵につき二〜三人がかりで運び、あまりの重さに足を踏み外して海に転落する者もいたという。

重量のある米俵を軽々と扱う相撲取たちに対して、アメリカ側は驚嘆の意を示した。橘樹郡市場村（現在の横浜市鶴見区）の名主役の添田知通が編纂した『亞米利加船渡來日誌』には、「異人共力量ニ驚キ候容子ニテ⁽⁴⁹⁾」との実感が表現されている。

『墨夷応接録』には、日米の条約交渉に立ち会った林復斎の直接的な見聞が残されている。林復斎は、「相撲取七拾五人程参り、耆人ニて忒俵ツ、かづき、耆丁計之処相運ひ、其外色々俵ニて曲持致し見セ候処、ペルリ、アータムス始、異人皆々感心致し候⁽⁵⁰⁾」と書き綴り、相撲取たちが米俵を二つ担ぎ、「曲持」（手足をはじめ身体のさまざま部位を使って重い物を持ち上げ自由に操る技芸）を披露しながら一丁（約一〇九メートル）ほどの距離を運搬したこと、それを見たペリーと参謀長のヘンリー・アレン・アダムズ（以下「アダムズ」）をはじめアメリカの面々が一様に感心していたことを伝えている。

ほかに、この場面に立ち会った福山藩士の江木繁太郎の手記には、米俵の運搬を見物した模様が述べられている⁽⁵¹⁾。

角力士九十人上下五斗俵二百苞ヲ取りナヤムヲ見物ス 其時ハ浜辺ニ腰掛出テ使節モ腰カケテ見物ス 銃隊ハ行
列ヲ変海ヲ後ニシテ二行ニ立使節ヲ守ル 力士九十人真裸ニナリニ俵ヅ、肩ニノセ軽々ト運一俵ヲ高く指上テ
来ルモアリ席ヲ敷テ色、曲持ヲ始象子端ハ五斗俵一俵ヲ持テヒツクリ反ツテ直ニ立挙リテ指上タルニハ尤膽
(胆―翻刻者注) ヲ潰タリ、アーダムスト云異人來リテ俵ヲ拳テ見タリ地切ヲ致タ迄ニテ笑テ止ス

江木は、相撲取が米俵を持ってさまざまな技芸を演じ「曲持」を披露したこと、ペリーらアメリカ使節が浜辺に
腰かけて見物していたこと、それを守るように銃隊が隊列を変えたことも観察していた。また、アダムズは自ら米
俵の運搬に挑戦したが、俵を地面から持ち上げたところで笑って止めたという。米俵の重量を直接確認したかのよ
うな行動である。

ここまで引用した諸史料が物語るように、相撲取たちは、贈呈品を輸送する任務に徹したというよりは、見世物
に類する多様な技芸を披露しながら米俵を持ち運び、アメリカ側もこの初見の運動文化を感嘆の意をもって受け止
めたといえよう。

四―二 土俵入りと稽古相撲の実演

米俵の運搬が済むと、続いて土俵入りと稽古相撲が行われた。相撲年寄は「土俵入并相撲取被仰付」⁽³²⁾との実施報
告を書き留めている。『亞墨理駕船渡來日記』に「相撲取土俵の曲持地取稽古仕御役人ニ入御覧候異人も見物ス」⁽³³⁾
と記されたように、アメリカ艦隊の一行も見物していたことがわかる。

『内密書』には、もう少し詳しい記述がある。⁽³⁴⁾

応接仮家後口之方ニ土俵場を為設、同所おいて俗ニ幕之内与相唱候相撲共、小柳常吉を初メ、三人請或ひハ式人請杯与申相撲稽古取杯、対馬守初好之由ニ相始、使節其外上官之分仮家裏窓分見物為致、異人共儀も暫興ニ入候躰哉ニ而詠居候由

応接所の敷地内に設置された土俵で、小柳常吉をはじめ幕内の相撲取が「三人請」「式(二)人請」と呼ばれる稽古相撲を披露した。日本の役人たちも応接所の裏窓から見物し、アメリカ側の面々もしばらく夢中になって相撲の取り組みに見入っていたという。

この時の土俵入りの順序と稽古相撲の組み合わせを表3に整理した。稽古相撲は、最後の鏡岩、象ヶ鼻、宝川のグループを除いて、基本的には小柳や雲龍ら幕内の看板力士に幕下ないし番付外の相撲取が挑む形で組まれている。ただし、新川、三ツ湊、西国のグループはいずれも番付外同士の構成となっているが、披露に値する期待の新鋭だったのか、あるいは何らかの調整弁として設定されていた可能性もある。

ペリーの付近で相撲見物に立ち合った江木繁太郎によれば、ペリーは相撲に興味を抱いたようで、「角力ハ珍敷様子也⁽⁵⁵⁾」と観察した。また、ペリーの外観から、「彼理ハ温順ノ氣質ト承ル、∴彼理ハ深沈トシテ機ヲ不見二度程笑ヒテ黙々トシテ居タリ音色モ温ナリ∴」⁽⁵⁶⁾と描写している。江木の眼には、ペリー(彼理)は「温順」な氣質に映り、初見の相撲に興味深く見物し、二度ほど笑ったという。

四―三 日米の相撲の対戦をめぐる

『温恭院殿御実紀』には、この日の出来事として、左記のような一節が書き留められている。⁽⁵⁷⁾

表3 安政元（1854）年2月26日の土俵入りと稽古相撲の参加者

土俵入り		稽古相撲 (左右の力士が対戦)	
東の方	西の方		
大見崎 大五郎	旭野 松五郎	雲龍 久吉	龍ヶ峰 柳太
武者ヶ崎 利助	琴の浦		大蛇潟 大助
弥高山 鉄之助	松ヶ枝 喜三郎		三ヶ濱 政吉
龍ヶ峰 柳太	高瀬川 勇吉	荒熊 力之助	弥高山 鉄之助
箕嶋 邦五郎	白真弓 肥太右衛門		武者ヶ崎 利助
和田ヶ原 甚四郎	沖ノ濱 勝蔵		大見崎 大五郎
谷風 市蔵	黒崎 佐吉	新川 平助	三ツ湊
荒岩 亀之助	宝川 石五郎		西国
響灘 立吉	一力 忠五郎	小柳 常吉	黒崎 佐吉
御用木 雲右衛門	象ヶ鼻 灘五郎		松ヶ枝 喜三郎
雲早山 鉄之助	黒岩 十太郎		立田ノ 吉蔵
君ヶ嶽 助三郎	荒馬 吉五郎	黒岩 十太郎	沖ノ濱 勝蔵
荒熊 力之助	階ヶ嶽 龍右衛門		箕嶋 邦五郎
雲龍 久吉	常山 五郎次		湊岩 幸介
小柳 常吉	鏡岩 濱之助	一力 忠五郎	旭野 松五郎
			島田川 又吉
		鏡岩 濱之助	立岩 金吉
			象ヶ鼻 灘五郎
			宝川 石五郎

追手風喜太郎・玉垣額之助「嘉永七寅年 二月廿八日 相撲年寄總代上申書」維新史料編纂会・文部省編『大日本維新史料 第2編 第5』文部省、1943、pp.146-149／藤岡屋由蔵「藤岡屋日記 第四十六 海防全書」鈴木棠三・小池章太郎編『近世庶民生活史料 藤岡屋日記 第五卷』三一書房、1989、pp.621-622より作成。

※土俵入りおよび稽古相撲は、それぞれ降順で行われた。

※史料上、フルネームの四股名が判明しない力士は姓のみを表記した。

異人共小柳と角力取試度旨。内々願出候に付許容に相成。アメリカ船中に而大力大兵之者三人取掛候處。一人を脇へ搔込。一人を押伏。一人を上へ差上候よし。異人共手を打て感じ。通詞森山榮之助江。いかにしてか、大力無双之者有之哉と尋に付。日本之上米を食し上酒を呑候故にと答候由。

アメリカ船の乗組員が大関の小柳常吉と相撲を取りたいと申し出て、日本側もこれを聞き入れた。アメリカ船内で小柳は力自慢の大柄な乗組員三人を相手に戦いを演じ、そのうちの一人を脇に抱え、一人を押し伏せ、一人を高く持ち上げて圧倒した。見物していたアメリカ人は手を叩いて感動し、通訳を通じて、どうすればこんなに強くなるのかと尋ねたところ、小柳は日本の美味い米を食べて美味しい酒を飲むことが秘訣だと答えたという。

この文面は、後に『嘉永明治年間録』⁵⁸という編年体の史料集にも収載され、序論で示した『黒船談叢』⁵⁹でもエピソードが紹介されたことで、真実味を帯びて後世に伝えられることとなった。

『温恭院殿御実紀』の内容が事実だったなら、安政元（一八五四）年二月二六日には、日米の相撲の対戦が行われていたことになる。

もう一点、日米の人員が対戦した形跡を示す文献がある。『小倉藩横濱日記』の二月二六日の記事には、稽古相撲の実演後に繰り広げられた出来事が「異人等角力之眞似をいたし候而、與力同心杯相手取、戯れニ取組候得共、角力は不得手ニ而、大兵ニ候得共、多分取負候、右角力取被差出候ハ」と記されている⁶⁰。相撲実演の後、喜んだアメリカ人が日本の役人らを相手に相撲の真似事をはじめ、やがて相撲取たちもこれに参加したという。初めて相撲を体験した大柄なアメリカ兵たちは日本人に次々と負かされたようである。この日米の対戦はあくまで「戯れ」であって、真剣勝負ではなかったと見えるが、相撲という日本の運動競技をアメリカ人が体験し、日米の対戦という

形で直接的な交流が図られたことは大方の史実だったといえよう。ただし、そこに小柳が参画し『温恭院殿御実紀』に記されたような戦いを演じたのか否か、真偽は定かではない。

任務を終えた相撲取たちは、その足で江戸に帰府した。『浦賀御用日記』は、「相撲之もの御用濟ニ付、歸府可申付哉之旨相伺候處、伺之通被仰渡間、年寄共呼出申渡、尤乗船手當之儀、南年番方ニ而申付候筈懸合ニハ候得共、差懸り候儀故、當所廻船問屋江申付、大漁船一艘相雇⁽⁶¹⁾」と伝えている。浦賀奉行所の与力は、相撲取たちを江戸に帰府させるため相撲年寄に船の手配状況を確認したが、行き違いがあったため、浦賀奉行所が横浜の廻船問屋に依頼して大きな漁船一艘を雇ったという。

五 アメリカ側の史料にみる異文化からの眼差し

相撲取たちのパフォーマンスは、ペリーをはじめアメリカ人の眼にはどのように映ったのであろうか。相撲実演に立ち会ったアメリカ人たちの記録から確かめてみたい。

五―一 相撲取の風貌に対するアメリカ側の反応

ペリー艦隊の公式遠征記録には、日本の相撲取に対する初見の印象が、「突然、全員の視線が、たくさんの巨象のように海岸を踏みつけながら歩いてくる巨漢の集団に釘付けになった⁽⁶²⁾」と記されている。ペリーの相撲取に対する第一印象は「巨象」で、人並外れた大柄な集団に衝撃を受けたようである。相撲取の廻しは、「腰まわりの色のついた布だけの衣装⁽⁶³⁾」と表現された。

また、日本側の史料にも記されていたように、相撲取の中でも特に注目を集めたのが大関の小柳常吉だった。ペ

リーは、小柳を目の前に呼び寄せ、実際にその巨体に触れた様子を描写している。⁽⁶⁴⁾

日本一の暴れ者として名高いコヤナギ（大関の小柳常吉―引用者注）も相撲集団の一人で、巨体と腕力を誇示しながらのし歩いていた。その巨体を見せるために、コヤナギは提督の前に連れてこられた。相撲取の付き添い人たちは、この丸々と肥えた筋肉がどれほど堅いか、ふくらんだ身体がどれだけ弾力があるか、手で触って調べるように勧めた。提督は、コヤナギの巨大な腕を掴み、それが大きいだけではなく堅い質感であることに気が付いた。それから提督が太い首に手を回すと、その首は品評会で入賞した牛の喉の肉のように、肉の塊が何重にも折り重なっていた。

ペリーは小柳の身体に直接触れて、相撲取がただの肥満体ではなく筋肉をとまなう「堅い」身体であることを認識した。その後、小柳の首に手を回したペリーは、その感触を「牛」と言い表し、異文化の初見の事物に対して関心を示した。

ペリーと小柳のやり取りは、通訳のサミュエル・ウエルズ・ウィリアムズ（以下「ウィリアムズ」）の日記にも登場する。ウィリアムズは、「一番大きな相撲取（大関の小柳常吉―引用者注）が、ペリーに自分の太鼓腹を拳で殴らせた。」⁽⁶⁵⁾と書いている。

艦長秘書としてペリーに随行したJ・W・スポルディング（以下「スポルディング」）は、相撲取の戦闘能力に懐疑的であった。スポルディングは、「この男たちは、大変骨が高く、ひどい肥満体で、手足は大砲を持ち上げるか一連の馬に抵抗するムシユ・ポールのように骨ばった筋骨たくましさや、アメリカのトム・ハイヤーやサリヴァ

ンのような拳闘家の動きは全然見られず、なんなく打ち負かされるのは疑いない。⁽⁶⁶⁾」と記し、自国の格闘家と比較して相撲取の強さは著しく劣ると酷評している。

しかし、スポルディングが抱いた印象は特異なものではなかった。それ以降に来日した欧米人の日記には、日本の相撲取に対して、「力士の身体は、トレーニングについての我々の考え方とはまったく相容れない。あのような肉と脂肪の塊りがどうして大きな力を発揮できるのか、私には到底理解できない」⁽⁶⁷⁾、「背の高さばかりでなく、身体全体が大きく、脂肪と肉の大きな塊であり、それを見ると練達とか筋肉の持久力とかがあると信じるわけにはいかない」⁽⁶⁸⁾、「彼らが仕上げられているほどの肥満体でもって、果してどれだけの力が出せるか、わたしには疑問であった」⁽⁶⁹⁾などといった印象が記録されているからである。

このように、アメリカ人たちにとって、日本の相撲取は異文化に属する理解し難い集団に映ったといえよう。

五―二 米俵の運搬に対するアメリカ側の反応

相撲取による米俵の運搬について、アメリカ側はどのような反応を示したのであるうか。ペリーの遠征記には、次のような見聞録がある。⁽⁷⁰⁾

この男たちは、腕力を見せるために、海岸の船に積み込みやすい場所まで米俵を持ち運んだ。∴相撲取たちは、二つの米俵を右肩に担いだが、最初の一俵は自分で地面から持ち上げて、二つ目の米俵は他者の補助を得て肩に担ぎ上げた。ある者は一俵を歯にぶらさげて運び、ある者は米俵を両腕に抱えたまま何度も宙返りをしていた。

ペリーは、米俵を運ぶ相撲取の怪力と華麗な技芸に驚嘆している。相撲取は一度に二つの米俵を持ち歩ける力量を持ち、米俵を歯でぶら下げる者、米俵を抱えたまま宙返りをする者もいたようである。ウィリアムズも、さまざまな方法で米俵を巧みに操りながら持ち歩く相撲取たちの姿を描写し、彼らの日常的な鍛錬を高く評価している。⁽⁷¹⁾

応接係はペリーを屋外の正面に案内した。すると、約九〇人の裸の相撲取たちが登場した。相撲取たちは米俵を運び歩いたが、頭上に二俵をのせる者、前歯で米俵を啣える者、腕の先端にのせる者、背に担ぐ者など、さまざまな方法で怪力を誇示しながらパレードした。彼らは日頃からこのような技を磨き、頑健な身体に鍛え上げている。

ス波尔ディングも、「彼らはまず自分の力を見せつけることから始め、手を肩にかけて投げるとか地面に横になつてそれぞれ二百ポンド(約九〇・七キロー引用者注)の米が入っている大きな俵を抱えてひっくり返すようなことをする。」⁽⁷²⁾と述べ、その視線の先には米俵を自由自在に操る怪力の相撲取の姿を捉えていた。

アメリカ側の見聞録を見る限り、日本側の史料が伝える内容と大きな相違はない。むしろ、米俵を巧みに操る相撲取たちのアクロバティックな側面は、客観的な視点を持つアメリカ人をして見抜いた特徴だったといえよう。

五―三 土俵入りの実演に対するアメリカ側の反応

ペリーの遠征記に「米俵のパフォーマンスが終わると、従者は相撲取の巨体に豪華な衣服を着せて、応接所へと先導した。」⁽⁷³⁾とあるように、米俵の運搬が終わると、相撲取たちはいったん衣服を着て、ペリーらを応接所に先導

した。

応接所の敷地内には土俵と見物席が設営されたが、ペリーはその模様を「建物前の直径約一二フィート（約三・六メートル―引用者注）の円形に囲われた敷地（土俵―引用者注）は、地面を掘り起こして平坦に整地され、屋根のある廊下には、日本の役人、ペリー提督とその随行者の見物用に赤い布で覆った長椅子が並べられていた。」と描写した。その後の土俵入りについて、ペリーは次のように記した。⁽⁷⁵⁾

見物人が着席すると、すぐに裸の相撲取たちが土俵に登場した。全員が敵と味方の二つの組に分かれ、前後に足を踏み鳴らして睨み合ったが、まだ競技は始まらなかった。この場面の目的は、相撲取が自分の長所をアピールし、見物人に対して、誰に賭ければよいのかを判断する機会を提供するためにすぎなかった。

相撲取たちが四股を踏む姿は、見物人が賭博のために力量を評価する機会だという。ウィリアムズの日記には、土俵入りのあらましが詳しく記されている。⁽⁷⁶⁾

最初に全員が円になって立ち並び、一種の所作なのか、自らの胸を叩き、手を擦り合わせ、脇の下や膝を手で擦った後で揃って退場した。次の組は派手な長いエプロン（化粧廻し―引用者注）を装着して土俵を回り、先ほどと同じ動作を一通り繰り返した。

相撲取たちが土俵上で輪になって、全員で独特の所作を行っていたこと、彼らが豪華な「長いエプロン」すなわ

ち化粧廻しを装着していたことがわかる。

このように、日本側の史料からは、土俵入りをした事実と入場の順序程度しか知り得なかったが、アメリカ側の史料の内容は、土俵上での相撲取たちの所作や立ち居振る舞いまで客観的な視点から伝えている。

五―四 稽古相撲の実演に対するアメリカ側の反応

土俵入りが終わると、稽古相撲の実演が披露された。アメリカ人の眼には、立ち合い前の間の取り方が印象に残ったようである。ペリーは、その様子を下記のように観察した。⁽⁷⁷⁾

二人の裸の相撲取が、土俵の両側に座っている先触れ人の合図で土俵に登場した。一人ずつ幕の後ろから現れて、巨大な動物のように悠然とした足取りで土俵の中央まで歩いてきた。…両者はしばらく腰を屈めて向かい合い、互いに相手の隙をつくチャンスを狙うかのように睨み合っていた。…睨み合いを続けながら、彼らは地面を強く踏みつけ、足で地面をかいた。その巨体を屈めて、地面の土を手に掴んで荒々しく背中にかけて、大きな掌の間や頑丈な脇の下にこすりつけた。

対戦する二人の相撲取が土俵の中央で向かい合い、蹲踞の姿勢から腰を屈めて睨み合いながら四股を踏み、土を身体にこすりつけて、さらに間を取っている様子が見事に描写されている。ウィリアムズも、同じ場面に注目した。⁽⁷⁸⁾

試合が始まると、二人の相撲取が土俵に上がってきた。まず、互いに向い合ってしゃがみ込み、掌や脇の下に土をこすりつけ、安定した足取りで土俵中央へと進んだ。それから互いに膝を押えたまま片脚ずつ交互に大きく開脚し、重厚な唸り声をあげて足を土俵に強くめり込ませた。この動作を数回繰り返して、牛が大地を足で搔くように手を土に擦りつけた。こうした一連の行動で、一分以上は費やしたであろうか。

彼は、二人の相撲取が四股を踏み、土を身体にこすりつけて間を取るサイクルがあり、それを繰り返す時間で一分以上を費やしたと書いている。

次に、ペリーは、「腰を屈めて睨み合い相手の動きを見据えていた両者が、瞬時に巨大な身体を同時に持ち上げ、牛も気絶するような強烈な勢いで身体をぶつけ合った。」⁽⁷⁹⁾と記し、両力士が阿吽の呼吸で立ち合いに移行した場面を書き綴った。

さらに続けて、ペリーは取り組みの模様を左記のように実況解説する。⁽⁸⁰⁾

両者の身体は、この衝撃にもバランスを崩さなかったが、衝撃の激しさは、身体から垂れ下がった肉の振動からわかった。両者は強靱な両腕を互いに相手の身体に回して組み合い、相手を投げ飛ばそうと全力を尽くした。屈強な筋肉はまるで巨大なヘラクレス像のように隆起し、充血した顔面は腫れあがり、赤くなった皮膚をつき破って今にも血が噴き出しそうで、その巨体は動悸で波打っていた。ついに一方の相撲取が、重量感のある巨体もろとも激しく地面に倒れると、手助けされて起き上がり、土俵から退場した。

最後は一方が土俵上に倒されて勝負が決着したようである。ウィリアムズも、立ち合いの場面とその後の展開を次のように見聞録に書き残している⁽⁸¹⁾。

相撲取は互いに肩を掴み合い、相手を押し倒そうと力を振り絞った。一方が頭から相手の胸を目掛けて突進した。受けた側は相手の身体を捻って投げ飛ばし、相手は地響きを立てて地面に倒れ込んだ。…どの相撲取も重量感があって強そうだったが、一番大きな男が勝者として残った。叫び声をあげて突進する者もいたが、そのような相撲取はえてして弱者だった。

この取り組みも、一方の相撲取が投げられて勝負が決した。また、大柄な相撲取が常に勝者になったと記されているが、この稽古相撲は幕内の看板力士に幕下や番付外の相撲取が挑む組み合わせで構成されていたので、彼の見立ては的を射ていたといえよう。

稽古相撲を見物していたペリーは、途中で相撲の形式が変わったことに気が付いた。左記のような説明が続く⁽⁸²⁾。

一人の相撲取は土俵の所定の位置についてから、足場を固めるように片足を前に出して防御の姿勢を取り、相手の攻撃を受け止められるように頭を深く沈め身を屈めて構えた。直後に、もう一人の相撲取が牛のように吠えながら、土俵上の相手に向かって突進し、低く前方に出した頭からぶつかった。…このような常に一方が攻撃し、もう一方が防御に回る格闘が何度も繰り返されるうちに、相撲取の額は血まみれになり、相手の胸は連続的な打突を受けて腫れあがった。

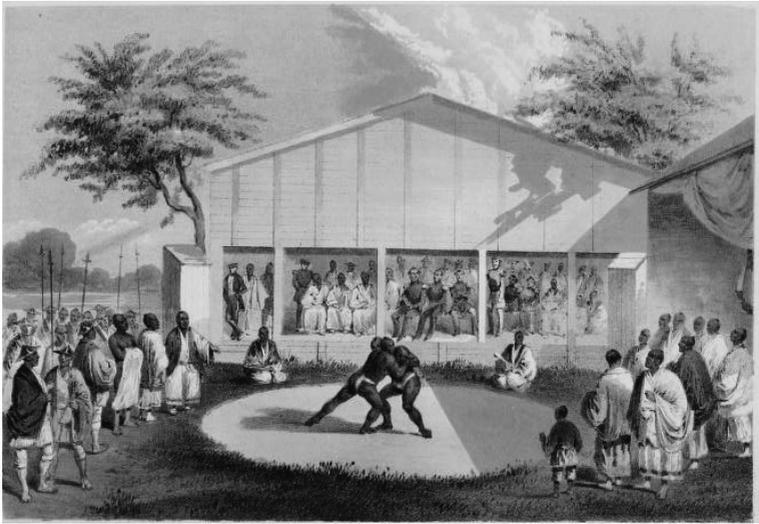


図1 ペリー艦隊の公式遠征記録に掲載された稽古相撲の様子

Perry Matthew C, Narrative of the expedition of an American squadron to the China Seas and Japan : performed in the years 1852, 1853, and 1854. Beverley Tucker, 1856

ペリーは、相撲取たちの技術的な特徴を客観的な視点から文章化した。その内容から、相撲取たちは通常の取り組みと合わせて、ぶつかり稽古⁽⁸³⁾を実演していたことがわかる。

ペリー艦隊の公式遠征記録には、この時の稽古相撲の様子を描いたイラストが掲載されている(図1)。

五―五 アメリカ側のスポーツ披露の有無をめぐって以上、アメリカ側の記録から、相撲取に対する印象、米俵の運搬、土俵入り、稽古相撲の内容を確認した。いずれも、初見の出来事が客観的な視点から描写されているが、日本側の史料と比較しても相違はなかったといつてよい。スポーツを通じて、日米の親善交流が図られていたことは事実であった。

日本の相撲取とアメリカ船の乗組員の対戦については、アメリカ側の史料には記されていないが、前述した日本側の史料の内容からも、日米双方の人員が対戦するという形で相撲を通じた交流が図られたと見てよい。た

だし、日本ではあたかも史実のように捉えられている小柳の武勇伝には、再考の余地が残されているといえよう。ところで、この親善交流の機会においては、アメリカ側も自国のスポーツを披露した形跡がある。アメリカ側の記録には、ボクシングの実演を暗示するような手掛かりが残されているからである。ウイリアムズは、左記のような興味深い内容を日記に書き込んでいた。⁸⁴⁾

今日、ここでは、東西の合流地点とでもいうべきか、蒸気機関車と電信機、ボクサーと訓練された運動選手、将校服の肩章と制服、剃り上げ頭とナイトガウン、火縄銃を持った兵士と密集陣訓練、袴に草履を履き帯刀した兵士とその無秩序さなど、奇妙でごちゃ混ぜな共演が行われた。

異文化同士の接触による東西の文化的な相違を実感したような文面である。ここでは、「ボクサーと訓練された運動選手」という記述に注目したい。日米の文化的な特徴を対比的に表現する文調の中で、アメリカのボクサーと訓練された運動選手すなわち日本の相撲取が並び立てられている。

この文面からは、ボクサーと相撲取の対戦の有無までは読み取れないが、アメリカ側がボクシングを実演したことを暗示している。推測の域を出ないが、仮にアメリカ側が披露したボクシングを日本人が見物していたなら、この日は、異文化に暮らす日米の者同士が、スポーツを通じてお互いのアイデンティティを認知し得る重要な機会だったといえよう。

六 結び

本研究は、安政元（一八五四）年のペリー来航時に行われた相撲実演について、江戸の相撲取たちの動向を中心に、その経緯や實際を繙いたものである。以下、得られた結果に若干の所見を交えて整理したい。

嘉永六（一八五三）年六月三日にペリー率いるアメリカ艦隊が来航すると、江戸の相撲会所は町奉行所に協力の意向を申し出た。その後、町奉行所からの聞き取り調査を経て、安政元（一八五四）年一月一六日のペリー再来航時には相撲会所の申し出が聞き入れられる。

町奉行所が相撲会所に命じた任務は、日本がアメリカへ贈呈する米俵を相撲取たちに運搬させることだった。この任務の遂行に適う人材として選ばされた江戸の相撲取たちは、二月一七日に船で浦賀へ移動し、東海道の保土ヶ谷宿に滞留して本番に備えていた。

二月二六日、条約交渉が行われていた横浜で、相撲取たちによる米俵の運搬、土俵入り、稽古相撲の実演が行われた。日本側の史料においては、相撲取による各種の実演が成功裏に行われたことが伝えられ、日本の相撲取とアメリカの乗組員が相撲の対戦を繰り広げたことも記されている。一方、アメリカ側の史料の内容は日本側の史料と相違はなかったが、彼らの初見の事物に対する客観的な眼差しは、相撲取たちが重たい米俵を巧みに操る技芸や、土俵上で演じた所作、立ち居振る舞いまで捉えていた。

アメリカ側の史料には、アメリカ側がボクシングを披露したことを暗示する記述が残されていたが、史料的な確証を得るには至らなかった。しかし、日本側の相撲実演をアメリカ側が見物し、日本人とアメリカ人が相撲で対戦していることから、この日の出来事は、日米スポーツ交流の端緒として位置付けられる。ペリー来航とは、日米

双方の者同士が、スポーツを通じて異文化を認知する重要な機会を提供するものだったと結んでおきたい。

〔付記〕

本稿は、JSPS 科研費 JP21K11374 基盤研究 (C) 「訪日外国人が見た近世日本のスポーツ―幕末～明治初期の見聞録を中心に―」(研究代表者…谷釜尋徳) の助成を受けて行われた研究成果の一部である。

〔注記及び引用・参考文献〕

- (1) 木下秀明 『スポーツの近代日本史』杏林書院、一九七〇、二頁
- (2) 今村嘉雄 『体育史資料年表』不昧堂出版、一九六三、四四八頁
- (3) 岩波書店編集部編 『近代日本総合年表第四版』岩波書店、二〇〇一、四頁
- (4) 浜田彦蔵 『漂流記下』一八六三、六〇丁
- (5) 伊東松雄 「安政の日米競技」森斧水編 『黒船談叢』下田文化協会、一九四七、八五～八七頁
- (6) 酒井忠正 『日本相撲史(上巻)』大日本相撲協会、一九五六、三四八～三四九頁
- (7) 伊藤八郎 『横浜と相撲』伊藤八郎、一九八九、二～一〇頁
- (8) 太田尚宏 「使節ペリーへの贈答品と相撲取」徳川林政史研究所監修 『江戸時代の古文書を読む―ペリー来航―』東京堂出版、二〇〇九、一三～四三頁
- (9) 西村直城 「嘉永七年、アメリカ船を見学した福山藩士に関する資料について」『広島県立歴史博物館研究紀要』一六号、二〇一四、二五～三六頁
- (10) 西川武臣 『亞墨理駕船渡来日記―横浜貿易新聞から―』神奈川新聞社、二〇〇八、一八九～一九三頁／西川武臣 『ペリー来航―日本・琉球をゆるがした四一二日間―』中央公論新社、二〇一六、一四四～一四七頁
- (11) 加藤祐三 『幕末外交と開国』講談社、二〇一二、一七三頁、一九一頁
- (12) 斎藤多喜夫 「交流と交換」横浜開港資料館編 『ペリー来航と横浜』横浜開港資料館、二〇〇四、三四頁、三六頁

- (13) 横浜市編『横浜市史第二巻』横浜市、一九五九、一一六頁
- (14) 町奉行所とは、江戸幕府の職制で江戸市政を管轄する役所を指す。江戸市中の武家地と寺社地をのぞいた町地を支配し、関連する立法、行政、司法、警察、消防などを司り、市政を総理した。町奉行所は、江戸時代には一般的に御番所と称されていた。江戸には二つの御番所があり、その位置関係から「南番所」ないし「南町奉行所」、「北番所」ないし「北町奉行所」などと呼び分けた。南北の町奉行所は江戸の町を半分ずつ管轄したのではなく、月番制をとって毎月交代で執務した（所理喜夫「町奉行」竹内誠ほか編『江戸東京学事典 新装版』三省堂、二〇〇三、二九三―二九四頁）。本研究における町奉行所とのやり取りは、町奉行所を介した幕府とのやり取りを意味する。
- (15) 本研究では、ペリー、ウィリアムズ、スポルディングの見聞録を使用する。このうち、ペリー艦隊の公式遠征記録（Perry Matthew C. Narrative of the expedition of an American squadron to the China Seas and Japan : Performed in the years 1852・1853 and 1854. Beverly Tucker. 1856）*ペーウィリアムズの随行日記*（Williams S. Wells. A journal of the Perry expedition to Japan (1853-1854). Kelly & Wash. 1910）は原書を用いるが、原文の訳出にあたっては既刊の日本語訳（ペリー「アメリカ艦隊の中国海域及び日本への遠征記」オフィス宮崎編訳『ペリー提督日本遠征記下』万来舎、二〇〇九／ウィリアムズ「ペリー提督日本遠征艦隊の日誌」洞富雄訳『ペリー日本遠征随行記』雄松堂出版、一九七〇）も適宜参考にした。スポルディングの日記は原文の入手に至らなかったため、日本語訳（スポルディング「日本遠征記」島田孝右訳『スポルディング日本遠征記 オズボーン日本への航海』雄松堂出版、二〇〇二）に依拠した。なお、ペリーの日記としてピノーが新たに編纂した書籍（ペリー「ペリー提督日本遠征私日記」金井圓訳『ペリー日本遠征日記』雄松堂出版、一九八五）も出版されているが、相撲披露の場面は前述の公式遠征記録と同内容であるため、重複を避ける意味合いで積極的な活用は控えた。なお、ペリーに随行した画家のハイネも日記（ハイネ「世界周航日本への旅」中井晶夫訳『ハイネ世界周航日本への旅』雄松堂出版、一九八三）を残しているが、ハイネは相撲実演の話題には触れていない。
- (16) 石川榮吉『欧米人の見た開国期日本―異文化としての庶民生活―』風響社、二〇〇八、二二二頁
- (17) 磯田道史「十九世紀の日本人」竹内誠監修『外国人が見た近世日本―日本人再発見―』角川学芸出版、二〇〇九、二二三頁

- (18) Perry Matthew C. Narrative of the expedition of an American squadron to the China Seas and Japan : Performed in the years 1852・1853 and 1854. Beverley Tucker. 1856, p.232
- (19) 斎藤月岑編「武江年表」金子光晴校訂『増訂武江年表二』平凡社、一九六八、一三五頁
- (20) 相撲年寄とは、江戸時代に師匠(親方)として弟子である相撲取を抱え、勸進相撲興行や地方巡業の主体になった者たちのことである(高埜利彦「相撲年寄」塚田孝編「職人・親方・仲間」吉川弘文館、二〇〇〇、一九〇頁)。
- (21) 太田尚宏「使節ペリーへの贈答品と相撲取」徳川林政史研究所監修『江戸時代の古文書を読むーペリー来航ー』東京堂出版、二〇〇九、三六―三七頁
- (22) 酒井忠正『日本相撲史(上巻)』大日本相撲協会、一九五六、三四六頁
- (23) 同前、三四八頁
- (24) 太田尚宏「使節ペリーへの贈答品と相撲取」徳川林政史研究所監修『江戸時代の古文書を読むーペリー来航ー』東京堂出版、二〇〇九、三七頁
- (25) 酒井忠正『日本相撲史(上巻)』大日本相撲協会、一九五六、三四八頁
- (26) 同前、三四八頁
- (27) 同前、三四九頁
- (28) 追手風喜太郎・玉垣額之助「嘉永七寅年 正月廿四日 相撲年寄總代上申書」維新史料編纂会・文部省編『大日本維新史料第二編 第五』文部省、一九四三、一三六頁
- (29) 追手風喜太郎・玉垣額之助「二月九日 相撲年寄上申書 町奉行へ 相撲取差出の件」東京帝国大学編『大日本古文書 幕末外国関係文書之五』東京帝国大学文科大學史料編纂会、一九一四、九六頁
- (30) 追手風喜太郎・玉垣額之助「嘉永七寅年 二月九日 相撲年寄總代上申書」維新史料編纂会・文部省編『大日本維新史料第二編 第五』文部省、一九四三、一四四頁
- (31) 同前、一四五頁

- (32) 斎藤月岑編「武江年表」金子光晴校訂『増訂武江年表二』平凡社、一九六八、一三六頁
- (33) 追手風喜太郎・玉垣額之助「嘉永七寅年二月九日相撲年寄總代上申書」維新史料編纂会・文部省編『大日本維新史料第二編 第五』文部省、一九四三、一四六頁
- (34) 「内密書」徳川林政史研究所監修『江戸時代の古文書を読む―ペリー来航―』東京堂出版、二〇〇九、二八頁
- (35) 「正月米船江戸内海渡來一件聞書及覺書」東京帝国大学編『大日本古文書 幕末外国関係文書之四』東京帝国大学文学部史料編纂掛、一九二二、五二五～五二六頁
- (36) 藤岡屋由藏「藤岡屋日記 第四十六 海防全書」鈴木棠三・小池章太郎編『近世庶民生活史料 藤岡屋日記 第五卷』三一書房、一九八九、六三二頁
- (37) 米使應接掛町奉行支配組與力「浦賀御用日記」維新史料編纂会・文部省編『大日本維新史料 第二編 第五』文部省、一九四三、一一一頁
- (38) 「内密書」徳川林政史研究所監修『江戸時代の古文書を読む―ペリー来航―』東京堂出版、二〇〇九、二八頁
- (39) 南定廻り「二月十九日南町奉行支配定廻り上申書 同奉行へ米人へ賜はるべき米運送の件」東京帝国大学編『大日本古文書 幕末外国関係文書之五』東京帝国大学文学部史料編纂掛、一九一四、二五七～二五八頁
- (40) 伊藤八郎「横浜と相撲」伊藤八郎、一九八九、三頁
- (41) 立田録助「正月二十三日若年寄達小普請奉行へ土俵用意の件」東京帝国大学編『大日本古文書 幕末外国関係文書之四』東京帝国大学文学部史料編纂掛、一九二二、三五八～三五九頁
- (42) 関口東作「関口日記」横浜市文化財調査会校訂『横浜市文化財調査報告書 第八輯の十三 関口日記 第十三卷 嘉永六年八月―安政四年十月』横浜市教育委員会、一九七九、二二頁
- (43) 林復斎「墨表応接録・初編」森田健司編訳・校注『現代語訳 墨表応接録―江戸幕府とペリー艦隊の開国交渉―』作品社、二〇一八、一三九頁
- (44) 「内密書」徳川林政史研究所監修『江戸時代の古文書を読む―ペリー来航―』東京堂出版、二〇〇九、三三～三四頁

- (45) 『温恭院殿御実紀』経済雑誌社校『続徳川実紀第三編』経済雑誌社、一九〇六、一〇二二頁
- (46) 追手風喜三郎・玉垣額之助「二月二十八日相撲年寄物代上申書町奉行へ横濱應接場相撲取組の件」東京帝国大学編『大日本古文書幕末外国関係文書之五』東京帝国大学文科史料編纂掛、一九一四、三六二〜三六五頁
- (47) 藤岡屋由蔵「藤岡屋日記第四十六海防全書」鈴木棠三・小池章太郎編『近世庶民生活史料 藤岡屋日記第五卷』三一書房、一九八九、六三二頁
- (48) 石川和輔「亞墨理駕船渡來日記」石野瑛編『武相叢書第一編』武相考古会、一九二九、三八〜三九頁
- (49) 添田知通「亞米利加船渡來日記」石野瑛編『武相叢書第一編』武相考古会、一九二九、一〇七頁
- (50) 林復斎「墨夷応接録 初編」森田健司編訳・校注『現代語訳 墨夷応接録―江戸幕府とペリー艦隊の開国交渉―』作品社、二〇一八、一四〇〜一四一頁
- (51) 江木繁太郎「江木鰐水手記」『広島県立歴史博物館研究紀要』一六号、二〇一四、三〇頁
- (52) 追手風喜三郎・玉垣額之助「二月九日相撲年寄上申書町奉行へ相撲取差出の件」東京帝国大学編『大日本古文書幕末外国関係文書之五』東京帝国大学文科史料編纂掛、一九一四、三六二頁
- (53) 石川和輔「亞墨理駕船渡來日記」石野瑛編『武相叢書第一編』武相考古会、一九二九、三八〜三九頁
- (54) 「内密書」徳川林政史研究所監修『江戸時代の古文書を読む―ペリー来航―』東京堂出版、二〇〇九、三三〜三四頁
- (55) 江木繁太郎「江木鰐水手記」『広島県立歴史博物館研究紀要』一六号、二〇一四、三〇頁
- (56) 同前、三〇頁
- (57) 『温恭院殿御実紀』経済雑誌社校『続徳川実紀第三編』経済雑誌社、一九〇六、一〇二二頁
- (58) 吉野真保「嘉永明治年間録 卷三 安政紀元甲寅」甫喜山景雄、一八八三、一六丁
- (59) 伊東松雄「安政の日米競技」森斧水編『黒船談叢』下田文化協会、一九四七、八五〜八七頁
- (60) 小笠原左京大夫「小倉藩横濱日記」維新史料編纂会・文部省編『大日本維新史料第二編第五』文部省、一九四三、一六五頁
- (61) 米使應接掛町奉行支配組與力「浦賀御用日記」維新史料編纂会・文部省編『大日本維新史料第二編第五』文部省、一九四

三、一、一三頁

- (62) Perry Matthew C. Narrative of the expedition of an American squadron to the China Seas and Japan : Performed in the years 1852 · 1853 and 1854. Beverley Tucker. 1856. p.369
- (63) *Ibid.*, p.369
- (64) *Ibid.*, p.370
- (65) Williams S Wells. A journal of the Perry expedition to Japan (1853-1854). Kelly & Walsh, 1910. p.147
- (66) スボルディング「日本遠征記」島田孝右訳『スボルディング日本遠征記 オズボーン日本への航海』雄松堂出版、二〇〇二、一〇一頁
- (67) Alcock Rutherford, The capital of the tycoon: A narrative of a three years residence in Japan. Bradley Co. 1863. p.282
- (68) オイレンブルク「公式資料によるプロイセンの東アジア遠征」中井晶夫訳『オイレンブルク日本遠征記 上』雄松堂出版、一九六九、二〇四～二〇五頁
- (69) パンベリー「日本踏査紀行」伊藤尚武訳『パンベリー日本踏査紀行』雄松堂出版、一九八二、一〇一頁
- (70) Perry Matthew C. Narrative of the expedition of an American squadron to the China Seas and Japan : Performed in the years 1852 · 1853 and 1854. Beverley Tucker. 1856. p.370
- (71) Williams S Wells, A journal of the Perry expedition to Japan (1853-1854). Kelly & Wash, 1910. p.147
- (72) スボルディング「日本遠征記」島田孝右訳『スボルディング日本遠征記 オズボーン日本への航海』雄松堂出版、二〇〇二、一一〇頁
- (73) Perry Matthew C. Narrative of the expedition of an American squadron to the China Seas and Japan : Performed in the years 1852 · 1853 and 1854. Beverley Tucker. 1856. p.370
- (74) *Ibid.*, p.370
- (75) *Ibid.*, pp.370-371

- (76) Williams S Wells, A journal of the Perry expedition to Japan (1853-1854). Kelly & Walsh, 1910, p.147
- (77) Perry Matthew C, Narrative of the expedition of an American squadron to the China Seas and Japan : Performed in the years 1852・1853 and 1854. Beverley Tucker, 1856, p.371
- (78) Williams S Wells, A journal of the Perry expedition to Japan (1853-1854). Kelly & Walsh, 1910, p.147
- (79) Perry Matthew C, Narrative of the expedition of an American squadron to the China Seas and Japan : Performed in the years 1852・1853 and 1854. Beverley Tucker, 1856, p.371
- (80) Ibid., p.371
- (81) Williams S Wells, A journal of the Perry expedition to Japan (1853-1854). Kelly & Walsh, 1910, pp.147-148
- (82) Perry Matthew C, Narrative of the expedition of an American squadron to the China Seas and Japan : Performed in the years 1852・1853 and 1854. Beverley Tucker, 1856, p.371
- (83) ちつかり稽古とは、稽古方法の「つて、ちつかる力士と受ける力士に分かれ、相撲の基本となる押しと受け身の型を身につける重要な稽古である(金指基『相撲大事典 第三版』現代書館、二〇一三、二九四頁)。
- (84) Williams S Wells, A journal of the Perry expedition to Japan (1853-1854). Kelly & Walsh, 1910, p.148

— たにがま ひろのり・東洋大学法学部教授 —